

1. 略歴

1976年3月	東京大学文学部考古学専修課程卒業
1978年3月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（考古学）
1981年3月	東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学（考古学）
1981年4月	東京国立博物館学芸部東洋課東洋考古室研究員
1988年7月	東京国立博物館学芸部東洋課主任研究官
1990年4月	東京国立博物館学芸部北東アジア室長
1996年4月	東京大学文学部助教授（附属文化交流研究施設朝鮮文化部門）
1998年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授（附属文化交流研究施設朝鮮文化部門）
2002年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授（韓国朝鮮文化研究専攻）
2010年8月	東京大学大学院人文社会系研究科教授（韓国朝鮮文化研究専攻）
	現在に至る

2. 主な研究活動

a 専門分野

韓国朝鮮を中心とする東アジアの考古学

b 研究課題

- (1) 朝鮮半島の古代国家の成立と発展過程を考古学資料から追求している。高句麗、新羅、百濟という三国史の枠を超えて、地域単位での発展過程を明らかにし、地域間の相互関係から国家の成立過程を追及する。
- (2) 高句麗壁画古墳を美術史や建築史とは異なる考古学の方法から分析して、壁画と石室の構成から編年を作り上げるとともに、当時の生活様相や社会を明らかにする。
- (3) 朝鮮考古学史では、戦前に朝鮮総督府を中心として行なわれた考古学発掘調査の成果を学術的な面から探っている。植民地政策としての古蹟調査事業のなかで、いかに学術的成果をあげてきたか、また日本における考古学の発展とどのようにかわってきたかを明らかにする。

c 概要と自己評価

これまでに発表してきた新羅考古学の論文をまとめ、新たな資料を追加した土器編年を組み立て直し「新羅考古学研究」（2010年）として出版した。それを基に新羅の国家形成について、古墳から出土した装身具の組合せの時間的変遷を求め、そこからいくつかの画期を見出し、考古学から見た国家の成立過程を明らかにした。

2010年と2011年に朝鮮民主主義人民共和国の社会科学院考古学研究所と共同で高句麗壁画古墳の調査を行った。その成果をもとに2015年には韓国・釜山大学校に招聘され、1学期の講義を担当した。今後も継続して壁画古墳の調査研究を行う予定であるが、保存に関しても日本の経験を生かしていきたい。

学史研究は、調査研究のみでなく、それを担った研究者の歴史認識まで深く掘り下げ、その成果を発表した。今後は、韓国の研究者との共同研究へと進みたい。

d 主要業績

(1) 学会発表

「日本の文化遺産国際協力—All Japan 協力体制の構築」『文化遺産国際開発協力の統合戦略模索』2016 ユネスコ遺産国際開発協力ワークショップ、国立古宮博物館、2016.3.29

「植民地朝鮮における考古学調査・古蹟保存と、それを通してみた朝鮮古代史像」『日本統治下の朝鮮における古代史研究・考古学・文化財』2016.4.23、早稲田大学

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本考古学会幹事（2014.4～2015.3、2015.4～）

朝鮮学会幹事（2014.4～2015.3、2015.4～）

高句麗渤海学会海外学会諮問委員（2014.4～2015.3、2015.4～）

(2) 他機関での講義等

招聘教授、韓国・釜山大学校、「東洋考古学特講」、2015.3～2015.6

非常勤講師、立正大学文学部、「考古学特講 8」、2015.9～2016.3

講演、「古代朝鮮の古墳文化」、甘粕健先生追悼記念講演会、明治大学、2014.7.12

講演、「世界遺産高句麗壁画古墳」、せたがや文化創造塾 2014.9.27

講演、「西都原古墳群の発掘と朝鮮古蹟調査—1910年代を中心とする日本と朝鮮の考古学調査」、宮崎県立西都原考古博物館、2015年2月1日

講演、「日帝強占期の古蹟調査」、韓国・国民大学校日本文化研究所、2015.4.23

講演、「新羅・加耶の考古学」、洗足区民センター、2015.10.10

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

文化遺産コンソーシアム東アジア・中央アジア分科会委員（2014.4～2015.3、2015.4～）

財団法人東洋文庫、研究員（客員）（2014.4～2015.3、2015.4～）

世田谷区文化財保護審議会委員（2014.1～2015.1、2015.1～）